

韓国戦争をどのように記憶し、記念しなければならないだろうか^{*1}

ソギョイボ
コ・ドンミン(西帰浦女子高等学校)

前回の連載では韓国戦争をテーマに放課後授業を開設することになった契機、韓国戦争の社会史研究の成果を反映した授業テーマ設定の背景、映画を活用した韓国戦争の授業事例などを紹介した。具体的に放課後授業で扱った三つの授業テーマを述べ、「平和のために私たちが韓国戦争で注目すべき物語は何か」、「戦争で崩れた共同体の信頼を回復するために何が必要なのか」など教師の核心質問に学生たちがどのような反応を見せたかを紹介した。

〈表1〉韓国戦争の放課後授業テーマ

省略。コ・ドンミン「戦争を通して平和を語ることができるのだろうか」(『歴史教育』2023年冬号)を参照(訳者)。

今回の連載では戦争捕虜と女性の戦争経験を核心内容とした授業事例を紹介し、韓国戦争の授業で平凡な個人の生を見ることがなぜ必要なのか語ろうと思う。それとともに韓国戦争の放課後授業を聞いた学生たちが制作した「停戦協定70周年記念展示物」の事例を通じて私たちは戦争をどう記憶し、記念しなければならないかに関する悩みを交わそうと思う。

テーマ4 戦争が襲った個人の生

今から70年余り前、韓国戦争が真っ最中だった時期に済州国際空港近くに中国軍捕虜収容所がつくられた。この収容所は中華人民共和国に送還を希望する、いわゆる「親共捕虜」5900人余りを収容するためにつくられたものだった。1952年10月1日、済州市捕虜収容所^{チエジュン}で中国軍捕虜が米軍の発砲で死亡する事件が発生した。発砲の理由は、捕虜が米軍兵士に向かって「石を投げて攻撃した」ことだった。捕虜が米軍に向かって石を投げた理由は何だろうか。10月1日は中華人民共和国の建国記念日で、中国軍捕虜は記念日に合わせて収容所に「五星紅旗」を掲揚した。五星紅旗が上がると、米軍は国旗を降ろせと三回命令した。捕虜が命令を拒否すると、米軍が収容棟に進入し、捕虜は進入する兵士に向かって石を投げた。午前8時20分頃米軍兵舎に石が飛び込むと、12回にわたって発砲が行われ、発砲は8時35分頃止んだ。発砲の結果56人の中国軍捕虜が死に、一人が重傷、9人が軽傷を負った^{*2}。

全国歴史教師の会で主管する「2023冬自主研修(1月12日～15日)」を準備しつつこの事件に初めて接した。済州島^ドに中国軍捕虜収容所があった事実もなじみが薄く、中国軍捕虜がどのような過程を経て済州島まで来るようになったのか気がかりだった。資料を調査していて中国軍捕虜が北韓軍捕虜と同様に反共捕虜と親共捕虜に分かれたので理念対立が激しく、国連軍が中国軍捕虜間の葛藤を利用して自由民主主義体制の優越性を宣伝しようとした事実を知るようになった^{*3}。

実際に中国軍捕虜の中には国民党出身で共産党に敵愾心を抱く人もおり、反対に共産主義を徹底して信奉する人もいた。親共捕虜と反共捕虜の指導者たちは「台湾か、大陸か」という質問を投げかけ、多数の中国軍捕虜を味方に引き込む作業を進めたが、両者の紛争があまりにも激烈であたかも「国共内戦の延長線」のような様相を見せたりした。捕虜間の紛争が流血衝突につながったりしたが、捕虜収容所を管理する国連軍は中立を守る代わりに反共捕虜

*1 本稿は『歴史教育』2023年冬号に連載した文章に続いて作成し、全国歴史教師の会で主管した2023下半年職務研修の原稿を小幅に修正・補完した。

*2 キム・ハクチュ「戦争捕虜の抵抗と反共オリエンタリズム」、『史林』36号、2010年。

*3 朴泰均『韓国戦争』本とともに、2005年、264ページ。

を支援する傾向を見せた^{*4}。捕虜送還問題が「心理戦」の性格を持ちつつ国連軍は捕虜収容所内で共産主義者が活動することを容認しなかったのである。

収容所内部の暴力状況が深刻になると、国連軍は親共捕虜と反共捕虜を分離して収容し始めた。その結果、中国軍捕虜の中の親共捕虜は「済州市収容所」に、反共捕虜は「西帰浦の慕瑟浦収容所」に分離した。この過程で親共捕虜に対する統制が強化された。捕虜収容所長ドットが親共捕虜に拉致された事件以後、捕虜収容所に対する統制はいっそう厳格になり、済州市捕虜収容所にいた中国軍親共捕虜が死亡した事件もこの時期に発生した。

停戦会談で捕虜協定が調印され、捕虜送還が行われ始めると、反共捕虜を自由陣営に説得するためのあらゆる手段が動員された。捕虜協定によれば、中華人民共和国に送還を希望する5640人の親共捕虜は全員本国に送還されたが、14500人余りの反共捕虜は板門店^{パンムンジョム}で出身国の説得を経て送還の有無を決定するようになった。台湾の蒋介石政府は慕瑟浦捕虜収容所に慰問団を派遣し、パイナップル、牛肉、ランニングシャツなどが入った慰問品を反共捕虜に分配し、彼らを説得するための多方面の努力を展開した。その結果、反共捕虜の中の440人だけの中華人民共和国送還を決定し、残りの14000人余りの捕虜は中国国民党政府によって台湾に送還された^{*5}。中国軍捕虜全体の大多数が本国に行かず、自由陣営に残ったのである。当時、アメリカCIA局長ダラスはこの結果をめぐって「共産陣営に対する心理戦で自由世界が収めたもつとも大きい勝利の一つ」と評価したりした。

本国送還を拒否して台湾に行った反共捕虜は、初めは英雄扱いを受けて大々的な歓迎を受けたが、以後は台湾社会の下層に属して悲惨な生活を続けた。故郷に戻った親共捕虜もやはり初めは歓迎されたが、以後「変節行為」について反省文を作成し、自己批判をしなければならなかった。共産党員は党籍を喪失し、故郷に戻った後も「変節者」の声を聞き、困難を味わわなければならなかった^{*6}。

台湾や中華人民共和国に戻った後も受難を味わった中国軍捕虜の生を見て、戦争と理念対立が個人の生をどのように変えたのか語ってみたいかった。そのため四つ目の授業テーマで戦争捕虜問題を集中的に扱った。授業時間に戦争捕虜がつくられる過程、捕虜収容所内の葛藤、戦争捕虜の処遇、帰還以後の捕虜の生について語った。戦争捕虜問題の他にも避難民や戦争孤児の生を照明し、平凡な個人は戦争をどのように経験したと思うのか学生たちに尋ねた。学生の考えは次のとおりだった。

学生1 平凡な個人が経験した戦争は、チェス版上の駒のようなものだった。その理由は、軍人の場合巨大な国家間の戦いで消耗品のように使われて遠いばかりの理念の前で生きるために互いを蔑視し、捕虜の場合、戦争が終わった後も歓迎されることのなかった生活を送らなければならなかったからだ。

学生2 平凡な個人が経験した戦争はぞっとするように残忍な組み合わせであり、すべてを失わせた破壊的存在だっただろう。利益追求のために、優勢な権力を持つために始めた戦争は単なる人間の生の被害につながった。戦争の中で平凡な人々は何の誤りもないのに検問され、拷問され、殺されるなど数多くの人権侵害を受けた。知人が、親戚が、家族がみな戦争で負傷し、変わり、失う過程で生を送っていく意志と目的をともに根こそぎ奪われたと思う。授業を通じて戦争というものがどれくらい残酷であり、再び起きてはならないと悟った。

学生3 平凡な個人が経験した戦争は、自我アイデンティティを失わせたのだ。その理由は、戦争が自我アイデンティティを形成するときに必要なすべてを奪っていったからだ。戦争は自我アイデンティティを形成する生の基盤を失わせ、家族を、友だちを奪っていった。自分らしく生きていく権利がある私たちに特定理念に固執し、自分のアイデンティティを成し遂げないようにした。戦争の中で生きていった彼らは真の自分自身が誰なのかもわからないまま毎日毎日の「生存」だけを見つめつつ生きていった。生殺しに他ならなかったのだ。このように戦争は人々の生から「私」を奪っていった。

戦争捕虜と関連した内容を学んだ後で映画<スウィング・キッズ>をいっしょに鑑賞した。<スウィング・キッズ>は国籍・人種・言語・理念の異なる多様な指向の人々が巨済島捕虜収容所^{コジエド}で出会ってダンス団を結成してタップダンスを踊る姿を盛り込んだ映画である。映画を鑑賞した後、映画の中で「タップダンス」が象徴する意味は何か、映画を通じて監督が伝えたかった物語は何か学生たちに尋ねた。ある学生は映画でタップダンスが「自由」を象徴していると言及

^{*4} 唐鑫「韓国戦争期の中国軍捕虜送還問題に関する研究」、ソウル大学校国際大学院修士学位論文、2021年。

^{*5} パク・ヨンシル「台湾行きを選択した韓国戦争中国共産軍捕虜の研究」、『アジア研究』163号、2016年、190～192ページ。

^{*6} キム・ボヨン「韓国戦争の捕虜交渉と中国軍捕虜の選択」、『史学研究』123号、2016年、202ページ。

し、映画のメッセージを次のように語った。

「この映画の監督は私たちが互いを嫌う理由は、会うことができず、経験しなかったからだと言いたいようだった。この映画でスウィング・キッズのチームは、理念がまったく違う人々が集まってつくったチームだ。この映画の主人公・ギスはアメリカを嫌い、社会主義理念を信じていた人だったが、タップダンスというアメリカの文物を直接経験し、アメリカに対する感情がしだいに変わるのを見ることができた。これを通じて私たちは理念が違うという理由だけで互いを嫌っていたことがわかった。そのためこの映画の監督は『私たちは理念によってのみ争っている』という話を伝えたいようだ。」

授業の最後に戦争捕虜だったが、南韓でも北韓でもなく中立国を選んだ朱栄福チュヨンボクの生について語った。朱栄福は人民軍少佐の身分で韓国戦争に参戦したが、じきに捕虜となった。彼は捕虜送還審査が進められたとき中立国に行くことを選択し、後日戦争経験を回顧して南韓と北韓社会に次のような質問を投げかけた。「(民主主義)革命を口実にして全国の無辜の良民数万人を投獄・虐殺したこと、(正義の)使徒を口実に済州島の老若男女数万人を屠殺したことはどこが違うのか。二つとも武装暴徒でないのか！」北韓と南韓政権が強調する「同一性」の論理に強力な拒否感を示していた彼は、「国民国家」談論を越えて「国境なしにすべての人が和やかに生きるべきだ」という「国際主義」を主張した^{*7}。朱栄福の事例を最後に言及して戦争のような極限状況の中でも理念よりも人のほうが重要だと語った。そして、先の学生の話のように今後も「理念だけでこのように戦って」いるのではなく、理念・国籍・人種が違って互いにどのようにすれば生まれ、しっかりと生きていけるか悩まなければならないと語り、授業を終えた。

テーマ5 戦争は女の顔をしていない

スヴェトラナ・アレクシエーヴィチは『戦争は女の顔をしていない』で「私たちは戦争についてのすべてを『男の声』を通じて知った」と宣言した。アレクシエーヴィチは、第二次大戦に参戦した女性たちの話を聞き、それまでの戦争の物語で「女性たちの声」は聞くことができなかつたと強調した。考えてみると、韓国戦争の記録にも女性たちの話は排除されていた。歴史教科書にも記録されず、有名な韓国戦争研究書を読んでも女性たちの話は簡単に接することができなかつた。参戦女性、韓国軍「慰安婦」、戦争未亡人の話はどこで聞くことができるのだろうか。戦争の記録から排除された女性たちの話を復元して学生たちとともに語ってみたいかつた。そのため五つ目の授業テーマとして「女性の戦争経験」を扱った。「参戦女性」と「戦時性暴力」問題を集中的に論議しつつ私たちがなぜ女性の戦争経験に注目しなければならないのか語ろうと思った。

第一に参戦女性の戦争経験を共有した。戦争当時、春川女子高1学年で参戦したが、2016年まで本人の経歴が国家有功者になることも知らず生きていたチョン・ギスクチュンチョンさんの事例を通じて参戦女性についての記憶がなぜ排除されたのか、彼女たちの声を私たちはなぜ聞くことができなかつたのか語った。第二に韓国軍「慰安婦」と国連軍「慰安婦」問題を論議しつつ「戦時性暴力」問題に迫った。韓国軍「慰安婦」問題を初めて明らかにした金貴玉キムグイオクの研究によれば、韓国戦争期の韓国軍の高位幹部は日本軍と類似のやり方で韓国軍「慰安婦」制度を導入した。軍の記録によれば、韓国軍「慰安婦」設置の目的は第一に軍人の士気高揚、第二に戦争によって避けられない弊害に対する予防的措置、第三に性欲抑制に伴う欲求不満や性格の変化に対する予防だと整理されているが、これは日本軍が「慰安」施設を設置した主な理由とあまり変わるところがなかつた^{*8}。また、当時政府は解放以後公娼制度が廃止されていたのに不法にも国連軍専用慰安所を設置し、運営することに介入したりした。

日本軍「慰安婦」と韓国軍「慰安婦」、国連軍「慰安婦」など戦時性暴力問題を学生たちに語る時「再現の倫理」について悩まざるをえなかつた。戦時性暴力問題を授業で再現するとき、被害経験を赤裸々に表したり、視覚的に再現する方法がもう一つの人権侵害を発生させないか悩んだ。そのため被害経験を描写するよりも国家の責任問題に集中した。金貴玉は、軍隊慰安婦制度が「国家による売春制度」だったと言及し、軍隊による慰安婦制度の基本的な特徴が「性病検診と治療制度」にあると強調した^{*9}。ナチの強制売春制度を研究したチョン・ヨンスクもやはり「軍隊が売春を管理すること自体に性統制という強制性がすでに内在されている」と強調し、「商業的取引きであれ、連れてこられた場合であれ、合意の結果であれ、強制されたものであれ、この問題で自発と強制を区分しようとする努力は本質

*7 チャン・セジン『隠された未来』青い歴史、2018年、138～140ページ。

*8 金貴玉「日本植民主義が韓国戦争期の韓国軍慰安婦制度に及ぼした影響と課題」、『社会と歴史』103号、2014年。

*9 同前。

的に意味がない」と述べている*10。戦時性暴力問題を語る時「自発性の神話」を掲げ、国家の責任を否定する人々の論理に対抗して国家がこの問題に本質的に責任があるという事実を強調しようと思った。

次に戦時性暴力問題を勇気を持って告発し、平和を語った人々に注目した。特に韓国戦争が真っ最中だった時期に北韓を直接訪問して戦時性暴力問題を調査した「国際民主女性連盟韓国戦争調査委員会」の活動に注目して扱った。イギリス、キューバ、カナダ、アルジェリア、ベトナムなど18カ国から来た21人の外国人女性たちで構成された韓国戦争調査委員会は、北韓各地を10日余り調査した後「私たちは告発する」という題名の調査報告書を出した。この報告書には戦時性暴力を経験した女性たちの苦痛に満ちた証言がそっくり盛り込まれていた。しかし、この報告書は「ソ連と共産党の宣伝パンフレットにすぎない」という非難を受け、しばらく無視され、調査委員会に参加した女性たちもやはり帰国後「裏切り者」扱いを受け、大変な苦勞をしなければならなかった。

イギリスの調査委員として参加したモニカ・フェルトンは報告書に自由陣営を批判する文章を書いたという理由で公企業代表の席から解任され、国家に対する反逆罪で死刑にしなければならないという非難に包まれた。数年間続いた非難に耐えることができず、フェルトンはインドに移住してそこで亡命者として生きていくことになるが、彼女は死ぬまで韓国戦争調査報告書の内容をただの一度も否定しなかった。そして、平和運動を続けた。彼女は韓国戦争の惨状を調査しようと旅立ち「(私の)唯一の目標は真実を発見することであり、真実を発見した場合、それを世の中に知らせることだった」と説明した。冷戦の時期にフェルトンは「祖国の裏切り者」と烙印を押されたが、最近の研究を通じて彼女の生は韓国戦争の惨状と戦時性暴力を勇気を持って告発した「平和運動家」として再照明されている*11。

国際民主女性連盟とモニカ・フェルトンの生を語り、当代にも戦時性暴力問題から目を背けなかった人々が存在したことを語ろうと思った。それとともに日本軍「慰安婦」被害者から人権活動家に生まれ変わった金福童キムボクトンハルモニ(おばあさん)の生と水曜デモに参加する市民、平和ナビ(蝶)の活動に積極的に参加する大学生の行動を語り、戦時性暴力問題を解決するために私が何ができるか悩んでみようと思った。授業が終わった後、ある学生は次のような文章を作成した。

「これまで私たちは女性たちが味わった被害の事実をよく知らず、無関心だったり、無視してきたので(これからは一読者)彼女たちに注目しなければならない。彼女たちは自身の声にも誰も耳を傾けてくれない状況の中で勇気を出して自身の辛い経験または目撃したことを伝えることによって私たちが知らなければならない問題を水面上に浮び上がるように、社会情緒を変化させるよう努力した。これらの人々が味わった戦時性暴力問題に対して私は個人的な次元でさらに多くの関心を持ち、被害者をまっすぐな視線で見つめる姿勢を備えなければならぬと思う。政府が彼女たちに損害を賠償し謝ることも重要だが、大衆が先入観や誤解なしに彼女たちの被害の事実を受け入れ、被害者の補償を促さなければならないという声をともに上げてこそはじめて被害者を尊重する社会が完成されると信じる。また、友だち、家族のような周辺の人々とこの問題について話を交わし、この事実が忘れられないようにすることも役に立つと思う。」

米軍の基地村問題でわかるように戦争が終わっても戦時性暴力問題は韓国社会でずっと続いてきた。最近ではロシア・ウクライナ戦争が勃発し、ロシア軍の性暴力問題が国際社会の批判を受けている。戦時性暴力問題は依然として現在進行中にある。日本軍「慰安婦」と韓国軍「慰安婦」問題を歴史の授業で語りつつ国際社会で発生している戦時性暴力問題からもやはり目を背けてはならないと考える。

テーマ6 戦争の記憶と記念

放課後授業で韓国戦争に関連した五つの授業テーマをすべて学んだ後、学生の活動として停戦協定70周年記念展示物を製作する授業を進めた。記念展示物を製作するとき①戦争を通じて平和を省察できる題名とテーマを選定し、②それまでに授業で学んだテーマの中で私たちが記憶すべき内容を紹介し、③授業時間に鑑賞した映画の中から友だちに紹介したい映画を選択するよう案内した。

〈展示物1〉をつくった学生は、韓国戦争が村に及んで民間人虐殺が起きたこと、多くの民間人が戦争を避けて避難しなければならなかったこと、戦争によって女性たちが「性の商品化」されたことが戦争の失敗を示していると言及し、「私たちが戦争で得たものは多くの失敗」だと強調した。〈展示物2〉をつくった学生は、「いつまで逃げなければな

*10 チョン・ヨンスク「ナチ国家の売春所と強制売春」、『女性と歴史』29号、2018年。

*11 金泰佑『冷戦の魔女たち』創批、2021年。

らないだろうか」という題名で戦争孤児と避難民の話に注目した。特に興南撤収作戦当時メラディス・ビクトリー号に乗ることができず、興南埠頭に残された人々の話を紹介し、はたして彼らにとっても興南撤収作戦が「クリスマスの奇跡」として迫ったか問い直す質問をしたりした。

〈展示物3〉や〈展示物4〉をつかった学生たちはそれぞれ「知らなかった彼女たちの話」と「戦争の後で遮られた個人の生」という題名で参戦女性と戦争捕虜の話に注目したりした。ある学生は、私たちが戦争をどう記憶しなければならぬかを省察しつつ展示物に次のような文章を残したりした。

「韓国戦争はどのような意味を持っているだろうか。私たちは単純な民族分断の物理的原因だだけ韓国戦争を受け入れてはいない。韓国戦争は決して韓半島内の問題だけではない。この戦争には世界的な問題がからまっていた。第二次世界大戦直後にくり広げられた戦争であるだけに多国籍の軍人が韓国支援軍として入ってきたし、中国軍もまた北韓支援軍として入っただけでなく、戦争

の中心には資本主義のアメリカと社会主義のソ連が位置し、韓半島の戦争は他の見方をすればもう一つの世界大戦と見られることもできるだろう。いわゆる先進国の風に巻き込まれて数多くの軍人と民間人死傷者を出した巨大な対立の戦争だから、私たちはこの戦争に対する態度としてすべてを「記憶」しなければならない。

単純に戦争自体を記憶するよりも戦争でどのような個人と集団が被害をこうむるようになり、韓半島共同体にどのような影響を及ぼし、韓国戦争がはたしてみなにどのような結果を呼びおこしたかを記憶しなければならない。私たちは[高地戦]で軍人個人の話を、[アイ キャン スピーク]で女性個人の話を、[鋼鉄の雨]で韓半島の民間人だけでなく全世界の人々の話を考え、探求しつつ彼らの話を記憶する方法を学んだ。方法は単純だった。くり返し語り、犠牲を賛え、すべての記憶の中に刻印させれば私たちは十分に彼らを記憶できるものだった。

「彼ら」は決して「彼ら」として残ってはいない。韓国戦争は過去に留まる悲劇の残骸ではなく、現世代の「私たち」にまで影響を及ぼす。韓国は全世界で唯一の民族分断国家であり、現在でも離散家族のような実質的な戦争後遺症が存在する。休戦は休戦にすぎないのだ。私たちは、少しでも両国家(の関係一訳者)が悪化するならば、いつでも戦争が再び始まるかもしれない状況に置かれている。指を数回動かしても簡単に統一を成し遂げられるわけではないが、万一私たちが記憶する態度で戦争に対するならば、統一までは難しいとしても戦争を終わらせ、平和を成し遂げることはできるのではないだろうか。個人の生と多数の犠牲を忘れず、賛えるならば国際社会の平和を成し遂げるための第一歩を踏むことができるのではないだろうか。このような態度と心がけのほう私たちが平和にする第一歩に迫ることができる手だてとなるだろう。」

歴史社会学者康誠賢は、戦争記念館の戦時ナラティブを分析した結果に基づいて「戦争を記念する所に平和はない」と強調する。彼は、戦争記念館の展示が戦闘史中心に再現されることに問題があると指摘し、「平和史」の観点で民間人被害者を中心に展示構成を多彩にすべきだと提案する^{*12}。戦争記念館だけでなく韓国戦争の記憶文化もやはり「六・二五」という開戦日に集中しつつ相手に向かう敵対感を育て、国軍の日の行事のように戦闘の勝利を記



〈展示物1〉戦争で私たちが得たものは

〈展示物2〉いつまで逃げなければならないだろうか

〈展示物3〉知らなかった彼女たちの話

〈展示物4〉戦争の後で遮られた個人の生

*12 康誠賢『小さな「韓国戦争」たち』青い歴史、2021年。

念するのに焦点を合わせていると考える。ところが、戦争を通じて平和を省察するためには上の学生が語ったように「単純に戦争自体を記憶するよりも戦争でどのような個人と集団が被害をこうむったのか」を綿密に覗くべきではないだろうか。平和の道は依然として遠いが、上の学生の話のように個人の生と多数の犠牲を忘れず記憶するならば平和にもう一歩近づくことができると考える。

おわりに

歴史学者は「こうしたとすれば今はどうなったか(What if……)」という質問を嫌う。起きなかったことについて真剣に論じる方法がないからである。ところが、私たちが歩んできた開発の道だけではなく他のさまざまな代案が存在したことを理解することは意味がある。歴史が一つの方向で営まれたわけではないという事実を理解すれば、今でも代案的な未来についての想像を集めることができるからである^{*13}。

科学技術学者ホン・ソンウクは朴正熙^{パクチョンヒ}時代に論議された「開発の道」が一つに固定されていたという通念を拒否する。そして、選択可能な代案の中から「他の道」を選択したとき私たちの未来はどのように変化したかをも想像してみようと提案する。「私たちの最初の高速道路がソウル・釜山^{プサン}ではなくIBRD(国際復興開発銀行)の助言どおりにソウル・江陵^{カンヌン}・大田^{テジョン}・木浦^{モクポ}・浦項^{ポハン}・光州^{クァンジュ}に置かれたとすればどうだっただろうか」、「最初の国土開発計画がソウルと釜山・慶南^{キョンナム}中心でなく、地域均衡をより満足する方式で立案されたとすれば、今私たちはどのように暮らしているだろうか」。

韓国戦争授業を準備したときも「他の道」についての想像をかなりした。左右合作運動が成功して分断を防げたとすればどうだっただろうか。全国のすべての軍人と警察が文亨淳^{ムンヒョンスン}署長のように民間人虐殺命令を拒否したとすればどうなったのだろうか。モニカ・フェルトンが告発した戦時性暴力問題を国際社会が真剣に受け入れていたら世の中はもう少し良くなったかなど。ホン・ソンウクの話のように歴史学者は「こうしたとすれば今はどうだろうか」を語らないが、韓国戦争の時期に「他の道」を選択した人々の姿を見れば時には選択可能な代案を想像するほうがより良い生をつくるための土台となるかもしれないと考えた。

「授業を学ぶほど戦争への多くの疑問が生じる。この戦争は本当に何を望んで始められたのだろうか。無辜の市民の生が崩れていくことを知っていたのだろうか。思想はなぜあれほどの波紋を引き起こしたのだろうか。戦争でなぜ市民まで被害を受けなければならなかったのだろうか。」

戦争捕虜をテーマにした授業を聞いて一人の学生が書いた感想文である。私もまたこの学生のように韓国戦争を勉強して多くの疑問が生じた。さまざまな資料を探して読み、長い呼吸で韓国戦争の社会史を語ったが、依然として戦争を通じて平和を語ることは難しい。それにもかかわらず、「代案的な未来」を想像し、歴史教育で平和を語るならば今よりずっと良い生をつくり出せるかもしれないと考える。

『歴史教育』2024年春号、164～177ページ

翻訳：三橋広夫、2024年9月15日

*13 ホン・ソンウク「開発の時代、断想」、『ソウル・レビューオブブックス』6号、2022年、90ページ。